台大日本語文研究第 26 期
2013 年 12 月、頁 127-156
2013-09-30 收稿、2013-11-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.133

關於日語近義漢語前綴詞素「逆-」「対-」「抗-」之分析

林慧君*

摘要

表示事物相反或是反抗、對抗之義的日語近義前綴詞素除了有「反-」「アンチ-」之外，還有「逆-」「対-」「抗-」等三詞；本篇論文首先分析「逆-」「対-」「抗-」此三個漢語系前綴詞素之語意用法及構詞特徵等，再將其分析結果與同樣是近義詞的中日同形漢語前綴詞素「反-」及日語外来語前綴詞素「アンチ-」做對照比較，探討其間的類似及差異之處，以釐清這五個前綴詞素其間的近義對應關係。

經由本篇論文考察，闡述釐清了這五個日語近義前綴詞素具有表示〈事物相反或是反抗、對抗〉的共同語意屬性之外，它們在做爲前綴詞素發揮造詞（派生詞）功能時，會因爲各自發揮其特別的語意屬性，而呈現日語本身不同詞種之間以及中日文彼此之間複雜的近義對應關係。此外，透過本篇論文所考察之漢語前綴詞素「逆-」及「抗-」的構詞現象，以及外来語前綴詞素「アンチ-」與漢語前綴詞素（「対-」「抗-」）之間的近義對應關係來看，本篇論文再次論證了日語漢語前綴詞素「反-」所具有的「由下而上」之「逆」概念。

關鍵詞：近義詞、前綴詞素、漢語、語意用法、語意屬性

* 國立台灣大學日本語文學系教授

An Analysis of a Synonym Set of Japanese Kango Prefixes: “GYAKU-”, “TAI-” and “KOU-”

Lin, Hui-jun*

Abstract

The purpose of this article is to analyze the semantic relationships among five prefixes with similar semantic attributes, “HAN-“, “ANTI-“, “GYAKU-“, “TAI-“, and ”KOU-”. Besides "HAN-" and "ANTI-", "GYAKU-", "TAI-" and "KOU-" are also Japanese prefixes which mean “opposite”, "against", and "opposed to". First, the research focuses on the three Kango prefixes, “GYAKU-“, “TAI-“, and ”KOU-”. We analyze similarities and differences on word usages, meanings, and word formation processes among the three prefixes. Then we take the three prefixes to further compare with the Kango prefix “HAN-“, which owns the same Kanji symbol in Japanese and in Mandarin, as well as the Gairaigo prefix “ANTI-“.

According to the analysis results, the five prefixes do not only have similar semantic attributes(opposite, against, and opposed to) by themselves, but are also shown apparent connections among their derivatives and Mandarin translations. In addition, based on the results we found from word formation of Kango prefixes "GYAKU-" and "KOU-", as well as from connections between Gairaigo prefix "ANTI-" and Kango prefixes, we once again proved that the Japanese Kango prefix "HAN-" possesses a core meaning of "opposite", which means "go from bottom to top".

Keywords: synonym, prefix, Kango, semantics, semantic attributes

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

類義漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」に関して

林慧君*

要旨

物事の反対や逆、または反対・対抗するといった意を表す類義接頭辞は、「反-」「アンチ-」のほかに、「逆-」「対-」「抗-」も挙げられるが、本稿では、まずこの三つの漢語接頭辞を取り上げ、それらの意味用法や造語的特徴について分析する。

その分析結果を踏まえ、日中同形の漢語接頭辞「反-」と外来語接頭辞「アンチ-」との対照比較も行い、それらにおける類似点や相違点などを検討する。更にこの五つの接頭辞がいかなる類義対応関係を示すのかを解明する。

本稿の考察では、この五つの類義接頭辞は〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉という共通する意味素性をもつ一方、派生語を作り上げるに当たり、それぞれの特徴的な意味素性が生かされることを確認した。また、それらは、中国語対訳ともやや複雑な対応関係を見せていることも究明できた。なお、漢語接頭辞「逆-」と「抗-」の造語現象、及び外来語接頭辞「アンチ-」と漢語接頭辞（「対-」「抗-」）との類義対応関係からも、日本語漢語接頭辞「反-」のもつ「下から上へ」の「逆」の概念が再び裏付けられた。

キーワード：類義語、接頭辞、漢語、意味用法、意味素性

* 台湾大学日本語文学科教授

類義漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」に関して

林慧君

一、はじめに

日本語の接辞の中には、類義語と捉えられるものとして、例えば、事物の形容や状態を表す接尾辞「-式」「-風」「-的」（例えば「日本式」「日本風」「日本的」）などがある[1]。また、接頭辞「反-」と「アンチ-」は語種は異なるものの、〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉などの意味を表す類義関係にある。その意味用法上の類似点や相違点、語構成上の特徴などに関する研究報告が提出されている[2]。

一方、中国語にも日本語と同形の接頭辞“反-”があり、例えば“反獨裁”“反貪污”“反偵察”[3]などのように用いられる。中国語の接頭辞“反-”には、日本語の接頭辞「反-」と類似するところもあれば、異なるところも見られるが、これについては林（2012）に詳しい報告がある。

ところで、日本の中国語辞書の一つである『中国語大辞典』[4]で、“反-”を含む派生語を調べてみると、必ずしも日本語の「反～」[5]という派生語に対訳されるとは限らないようである。例えば、

（中国語）		（日本語）
“反電壓”	—	「逆電圧」
“反斜坡”	—	「逆スロープ」
“反雷達導彈”	—	「対レーダーミサイル」

1 「-式」「-風」「-的」に関する研究は荒川（1986）、原（1986）、山下（2011）、林（2008、2011）などが見られる。

2 「反-」「アンチ-」についての考察は李（1999）、斉藤（2004）、林（2012、2013）などがある。

3 混同を避けるべく、本稿では中国語の語例を“ ”で、日本語の語例を「 」で囲み、区別する。

4 『中国語大辞典』（1994）角川書店発行。

5 本稿では合成語の接辞的要素 X として言う場合は「X-」、また、それを含む合成語全体をさして言う場合は「X～」と表記することにする。

“反間諜” ― 「逆スパイ」・「対諜報」

“反導彈” ― 「対ミサイル」・「アンチミサイル」

などのように、中国語の“反～”が日本語の「逆～」や「対～」といった派生語に訳されたりもするのである。

なお、林（2013）にも言及があるが、外来語接頭辞「アンチ-」を含む派生語は時々「反～」と置き換えられることもある。例えば、「アンチ主流派」と「反主流派」、また「アンチ改革」と「反改革」、「アンチ・アメリカ」と「反米」などの通りである[6]。しかし、中には「アンチエイジング」を「抗加齢」とも言うように、「アンチ-」が「抗-」に言い換えられる派生語例も見られる。

以上の二点、つまり“反～”の中日対訳、そして「アンチ～」の言い換え（類義派生語）から考えると、「逆-」「対-」「抗-」は、〈物事の反対や逆、または反対、対抗する〉といった意味素性をもち、「反-」「アンチ-」と意味用法上の類似性を有していることが浮かび上がる。

本稿では、この類義語どうしと思われる漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」を取り上げ、それらの意味用法や造語的特徴について考察を行うことにする。

接頭辞を含む類義派生語の意味の違いは接頭辞の意味用法の相違に関わると考えられる故、まず、「逆-」「対-」「抗-」の三つの漢語接頭辞を含む派生語の実例を調査し、その実例に基づく派生語の意味分析を行う。そこから接頭辞の意味用法を抽出し、それぞれの意味用法上また造語上の特徴を調べ、類似点や相違点などを突き止めたい。

そして、本稿で取り上げる「逆-」「対-」「抗-」三つの漢語接頭辞が、同じく〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉といった意味素性をもつ「反-」「アンチ-」といかなる類義対応関係を示すのかも解明したい。

---

[6] 林（2013：第六章）を参照。

二、先行研究について

漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」の考察に入る前に、〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉といった意味素性をもつ接頭辞「反-」と「アンチ-」の先行研究について少し述べておこう。

まず、漢語接頭辞「反-」については、日本語と中国語との対照分析を試みた林（2012）が挙げられる。この論文は日中対照分析を通した、日中同形の漢語接頭辞「反-」の、日本語と中国語における類似点と相違点がまとめられている。

日中同形の接頭辞「反-」には、

> 接頭辞「反-」の、「正」の反対概念を表す本来の基本義（ex.「反作用」“反對稱”）、また「反抗する。反対する。」という、最も造語力をもつ中心義（ex.「反自民」“反貪汙”）が、日・中両国語に共通している。

という共通点があることを、また

> 「反対から。逆から。」（ex.“反操作”“反盯人”）及び「予想と反対に、逆に妨害して対抗する。」（ex.“反攻擊”“反間諜”）という二つの用法は、日本語にはない、中国語特有のものである。

と、中国語“反-”に特有の用法もあることを報告し、日中の相違点も明らかにしている[7]。

ところで、字音形態素「反」には「下から上へ」及び「対等的」という二種類の「逆」の概念があるという。林（2012）は、中国語の“反-”はこの「逆」の二種類の概念を持っているのに対し、日本語の「反-」は主に「下から上へ」の概念だけを表し、「対等的」な「逆」の概念は欠如しているとし、接頭辞「反-」に含まれる「逆」の概念の日中の相違も指摘している[8]。

一方、漢語接頭辞「反-」と類義関係にあるとされる外来語接頭辞「アンチ-」に関して、林（2013：第六章）は、

---

[7] 林（2012）358～359 頁を参照。
[8] 上述した日中の接頭辞「反-」における異同は林（2012）を参照。

ア 1 :「～の反対。非～。～に似ていない。」

ア 2 :「～を防げる。～に対抗して妨害する。」

ア 3 :「～（対等的に）反対、対立する。」

という三つの意味用法を報告している。そのうち、ア 1 の用法は日中同形の漢語接頭辞「反-」と共通する用法とする。ア 2 は、日本語の「反-」には発達していない意味用法とし、また中国語の「反-」との意味用法上の類似点と語構成上の相違点も有すると言及した。なお、ア 3 が「アンチ～」派生語の一番中心的な用法であると主張している。なお、漢語接頭辞「反-」と関連しては、「アンチ-」が主として「対等的」な反対であるのに対し、「反-」は主に「下から上へ」の反対だとし、両者のもつ「逆」の意味素性が異なっていることをも指摘している[9]。

以上の先行研究は漢語接頭辞「反-」と外来語接頭辞「アンチ-」を中心に行った分析であるが、本稿では、それらを踏まえながら、「反-」「アンチ-」と類義関係にあると思われる、漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」を取り上げる。この三者のそれぞれの意味用法を考察した上、更に上述した「反-」「アンチ-」といかなる類似や相違があるかを明らかにしたい。

三、考察

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) [10]から、接頭辞「逆-」「対-」「抗-」を含む派生語を検索収集し、実例の派生語に基づき、その接頭辞の意味用法を分析する。

語の構成要素としての字音形態素は、語基か接辞かを判断しにくい場合がよくあるが、一般的には、「逆風」「対面」「抗体」などのように二字漢語に用いられた場合は語基的要素とし、「逆輸入」「対戦車砲」「抗加齢」などのように三字以上の漢語に用いられた場合は接

[9] 外来語接頭辞「アンチ-」と日中同形の漢語接頭辞「反-」との異同に関しては林（2013:第六章）を参照。

[10] 国立国語研究所、モニター公開データ（2013 年度版）。

辞的要素とすることが多い[11]。本稿もこのような立場に立ち、二字漢語と区別して主に接頭辞を含む三字以上の漢語及び漢語以外の成分と結合する例を派生語と考え、このような派生語を中心に考察を進めていく。なお、それら以外に「抗日」「抗災」といった派生語的な二字漢語も多数見られる故、必要に応じて、これらも触れることがあることを断っておきたい。

考察に入る糸口として、それぞれの接頭辞の意味を『日本国語大辞典』『大辞林』『大辞泉』[12]の三種の電子辞書から調べ、まとめなおして提示することにする。

（一）「逆-」について

「逆」という字音形態素の意味を辞書[13]に求め、字音語素（例、「逆襲」「逆境」など）と自立語（例、「順番を逆にする」など）としての意味をも合わせて調べてみると、

（1）物事の本来または普通の順序・方向・事態などと反対、さかさまであること。

（2）さからう。そむく。

と、大方二つにまとめられる[14]。

さて、今回、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から接頭辞「逆-」を含む派生語を、語基異なり[15]282 例拾い上げられた。その意味用法を、上記の辞書の記述に照らし合わせてみると、これ

---

[11] 宮地（1977）を参照。

[12] 『知識探索サイト　ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+』の中の『日本国語大辞典』と、『スーパー大辞林』（3.0）、『デジタル大辞泉』（バージョン 14.0）。

[13] 注 12 と同様。

[14] 見出し語としての「逆」には「道理や道徳に反対する」といった意もあるが、古典語だけの例しか見られない。そして、「のぼせる。上気する」という意の「逆上」や、「前もって」という意の「逆賭」は、造語限定の字音語素としての意味用法なので、取りあえずこれらは本稿では扱わないことにする。

[15] 本稿で言う語基とは、接頭辞との一次結合の語基のことをさす。例えば、「逆援助系」「逆援助交際」「逆援助費用」の 3 例の場合、接頭辞「逆-」と語基「援助」とが一次結合をしたあと、更に他の構成要素と二次結合をした複合語であるが、本稿では、主に接頭辞「逆-」との一次結合を分析するものなので、このような場合は合わせて語基異なり語数を 1 とカントする。ちなみに、今回「逆-」を含む派生語を延べ語数 383 例収集した。

らは殆ど、(1) の〈物事の順序・方向・位置関係などが反対であること。さかさま。〉という意味で用いられていることがわかった[16]。例えば[17]、

① 年下と見たね。たぶん、ヘアメイクかスタイリストかって、そんな感じ。ゲイかもしんないし、ちょっと私、聞き込んで来るわ」彼のところへ行ってまるで逆ナンパのようなふりをしながら、酒を一杯奢らせたうえに、根掘り葉掘り身元調査をしたのだった。(『ワルツ』2004)

② …巨人はランナー出しても得点に結び付く事ないまま敗れてしまい、今日は西武が勝って、西武にも逆王手となりました。明日も東京ドームにて、巨人ＶＳ西武戦が行なわれます。(『Yahoo!ブログ』2008)

などを見ることができるが、①の「逆ナンパ」というのは、普通男が女へという方向であるが、ここでは女が男に対して話しかけており、普通の状況と反対の方向性をもっているわけである。②のほうも、元々巨人のほうが優勝に王手をかけるという状態であったが、巨人は負けてしまうのに対し、西武は勝ったので、逆に西武の方が王手をかけるということになった。つまり、本来の勝敗の行方と反対な事態になったわけである。

以上のような実例から、接頭辞「逆-」が、物事の本来または普通の順序・方向・事態などとは反対・さかさまであることを確認することができる。一方、林（2012）で見たように、日本語の「反-」も中国語の“反-”も、「「正」の反対/あべこべの/裏返しの/～の反対」という意味用法を有しており、「逆-」の（1）の用法と類似性をもっていると見ることができる。このことから、接頭辞「逆-」と接頭辞「反-」が類義語関係にあることを認めることができる。

ここで、冒頭に述べた日中対訳における問題を考えてみよう。中国語の“反電壓”“反斜坡”“反封鎖”などの例は、なぜ同じく「～の反

[16] 282 例のうち、(2)の用法をもつ二字漢語の 4 例が含まれている。
[17] 用例文中の波線は筆者による。以下も同様。

対」といった意味素性をもつ「反～」派生語に訳されず、「逆-」を含む派生語の「逆電圧」「逆スロープ」「逆封鎖」に訳されるのであろうか。これは、接頭辞「逆-」の〈本来または普通の方向・事態とは反対である〉という意味素性に起因するものと考えられる。例えば、「逆回り」というのは「順回り」の反対語である如く、つまり、「逆」というのは「順」の反対だということであり、元々あるべきまたは普通の方向と反対から後続の語基にはたらきかけたり、またはその語基の本来有するべき事態の反対であったりする、という意味を表すのである。

故に、本来または普通・一般の方向性を有するものや事態においては、〈その反対の方向や状態を表す〉、または〈反対の方向から〉、〈物事の順序が反対〉といった意を表そうとする場合、「逆-」が用いられるわけであろう。これが中国語の"反電壓"などが日本語の「反～」ではなく、「逆～」に訳される所以であろう。他に例として、「逆プロセス」「逆バブル」「逆ルート」「逆回転」「逆三角形」「逆常識」などもその特徴的な意味素性を表す例と言える。

上述した、(1) の意味用法はかなり発達し生産性をもち、和語や漢語、外来語、更にアルファベット混種語などとも自由に結び付くことができる。以下、もう少し語例を挙げよう。

「逆エビ固め」「逆サヤ」「逆ぎれ」「逆タマ」
「逆バネ」「逆廻り」「逆指名」「逆回転」「逆三角形」
「逆コース」「逆スパイ」「逆パトロール隊」……

この接辞的用法として生産性をもつ (1) の意味用法は実は派生語以外に、(派生語的な) 二字漢語を造り上げることもあるが、かなり少数と思われる。例えば、次の例を見よう。

③ 正番…【正番】とは、1号馬からプラス方向（左へ）順に数えた数字を指す。いわゆる馬番のこと。逆番…【逆番】とは、大外馬からマイナス方向（右へ）順に数えた数字を指す。【正番】の反対数字。（『サイン最前線「リンクの暗号」数字の仕組みを読み解いた！』2003）

④ 所々マンホール蓋の通気口から水が逆噴している光景は車の下の空間を隠すほどに冠水する雨季のバンコクを回想させる。（『Yahoo!ブログ』2008）

上の例に示してある如く、③の「逆番」というのは「「正番」の反対数字」という記述からも明白なように、〈反対〉の概念を表している。④の「逆噴」というのは、普通ならマンホールの中に水が流れ込むはずであるが、これとは反対にマンホールから水が噴き出ることを表しているのである。これらの「逆番」「逆噴」といった二字漢語を、二字熟語とすべきか、または派生語とすべきかは、判定しにくい面を持っている。斉藤（2004：114）は、「反日」「反戦」等の二字漢語の場合は、「反-」を語基としているみかたがあることを認めつつ、結合相手の有する意味が明確であるということ、また結合相手の語基に対して「反対する」といった意味を付け加えることなどからして、このような「反-」を接頭辞的用法として扱うことを主張している。本稿も、これに従い、「逆番」「逆噴」なども、接頭辞「逆-」を含む派生語的二字漢語と見る。

一方、「逆」の（2）の用法は、「さからう。そむく。」という意味用法であるが、これは〈下から上への反抗〉のことであり、前述した（1）の用法とは異なるものである。しかも、（2）の用法は、例えば「逆心」「逆賊」「逆徒」「逆命」などの二字漢語の造語だけに止まり、派生語の接辞としての働きはまったく発達していないようである。

（二）「対-」について

字音形態素「対」は、辞書[18]によると、「対峙」「対照」「対応」などのように字音語素として、また「男対女」「陰は陽の対だ」などのように自立語としてだけではなく、「対戦車砲」「対欧州貿易」などの例のように接頭辞としても用いられる。他に、「記事に対して反響があった」などに見られるように、漢語サ変動詞「対する」の語幹としての用法もある。このようにさまざまな用法があることを踏ま

[18] 注 12 と同様。

えながら[19]、漢語接頭辞「対-」の意味用法や語構成を詳しく見ていくことにしよう。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から収集した、字音形態素「対」を含む派生語の実例を検討してみると、「対-」の意味用法は大方次の六つにまとめられよう。

(1) 双方が向かい合って相手の関係になる。
(2) ある対象に向かう、かかわる。
(3) 立ち向かって、対抗する。
(4) 対象とする。
(5) 人に接する。応対する。
(6) 数量の比例、比率、割合

以下、準じて上に挙げた六つの意味用法に関して、それぞれ実例を挙げながら説明していく。

(1) 双方が向かい合って相手の関係になる。

まず、下の⑤と⑥の新聞例を見よう。

⑤ ヴィッセル神戸　市民特別観戦会５月１対アルビレックス新潟＝十八日十六：００ー２対浦和レッズ＝三十一日（近畿地方/兵庫県『広報誌』2008 年 04 号）

⑥ なお、チケットの売り切れの際はご了承ください　プレゼント　Ｊ１リーグヴィッセル神戸対アルビレックス新潟５／十八観戦券をペア５組に応募はＦＡＸ…（近畿地方/兵庫県『広報誌』2008 年 04 号）

例⑥からわかる如く、例⑤の「対アルビレックス新潟」は「ヴィッセル神戸対アルビレックス新潟」という句から前半部が省略された形態である。スポーツ試合などは、常にチームとチームまたは個人と個人と、向かい合って対戦するのだが、この〈双方が向かい合って相手の関係になる〉という(1)の用法は、例えば「二人目の対西武

[19] 字音形態素「対」の、字音語素と自立語としての意味用法、また漢語サ変動詞「対する」の語幹としての意味用法は多岐にわたっている。これらについては、紙幅制限のため割愛させてもらうが、必要に応じて取り上げることもある。

戦完投投手」「対「イングランド」戦への備え」などのように、試合関連などの文によく用いられる。

試合以外に、向かい合って対峙したりする場合にも用いられている。例えば、

⑦ そもそも首相公選制には米国をモデルとする大統領制型、米国型に近い日本の地方自治体型（首長制）、さらには議院内閣制型に分かれる。分岐点は、対議会との関係で相互に権力の抑制手段をもつか否か。（『政策秘書が書く国会議員改革』2003）

という例においては、後の「相互に」という副詞からも、即ち、「首長」と「議会」が双方向かい合って相手の関係になり、言わば、「首長対議会」ということである。

また、「政府の対アイルランド政策」「ベトナムは対カンボジア戦争」「エイデンハート投手は開幕第３戦の対アスレチックス戦」などの例でも、直接[A 対 B]という形態ではないものの、文の中に「対～」の前に向かい合う対象の A が示されており、即ち、「政府対アイルランド…」「ベトナム対カンボジア」「エイデンハート投手対アスレチックス」といったような相互対峙の関係だと考えられよう。

要するに、[A 対 B]という双方向かい合うという関係から、A が省略または脱落されたりして「対 B」という語形になるわけであろう。

今回接頭辞「対-」を含む「対～」派生語はコーパスから語基異なり 259 語例拾い上げ[20]、この(1)の用法をもつ例は 23 例（9%）あり、1 割近く占めている。

(2) ある対象に向かう、かかわる。

「対-」は、上の(1)の〈双方〉が向かい合う関係から、更に〈一方へ〉と、即ち、一方に向かう、という関係に変わることも考えられる。次の例を見よう。

⑧ ……中台関係についての中国の基本姿勢を示していた。こうして従来の対台湾統一戦線政策を繰り返すとともに、「われわれは台湾当局の指導者が適当な身分でこちらを訪問する

[20] 今回「対-」を含む派生語は延べ語数 459 例拾い上げた。

ことを歓迎するし、われわれも台湾側の招請を受け入れ、……（『香港回帰』1997）

⑨ クレムリンのマキュヴェリズムは疑えないにせよ、ソ連の対第三世界援助は、党の国家理性と同じくらい民衆の正義と友情と平和への強い関心を反映しており、……（『野蛮としてのイエ社会』1987）

⑧の「対台湾統一戦線政策」というのは、台湾に向かって統一戦線を組む、中国の一方的な政策という意を表す。⑨の「対第三世界援助」というのも、第三世界に対する、ソ連の一方的な援助をいう。

これらに見られる(2)の用法の、〈ある対象への一方的な〉という意味素性は、〈双方〉という意味素性をもつ(1)とは異なるものである。この〈一方性〉を有する「ある対象に向かう、かかわる」という意味用法は、

「対アフガニスタン支援」「対アフガン外交」

「対途上国輸入」「対メキシコ貿易」「対世界輸出」

「日本側が対台湾や対香港の貿易黒字」

「対顧客取引」「対教師暴力」「対左打者専用」

「対カトリックの問題」「対企業サービス」「対日本観」

などに見られるように、特に政治関係（外交や交渉、政策など）や戦争、そして貿易関係、人や社会・事柄などと様々な分野に数多く用いられている。

今回の「対～」派生語の実例調査ではさすがにこの意味で用いられるのが一番多く、語基異なり 145 語例（56%）も拾い上げられ、半分以上も占めている。

(3) 立ち向かって、対抗する。

前に述べた、(2)「ある対象に向かう」という意味が更に限定して軍事関係に用いられ、「～に立ち向かって対抗する」という意味用法が生じる。例えば、

⑩ 日本は蒋介石の対共産軍戦闘を援助するか、あるいは好意的中立を守り、いやしくも反国民党的態度をとるべきではなか

った。（『歴史からの警告』1999）

⑪ 彼らは政府機関内で-スパイ、秘密警察、「特殊部隊」、対ゲリラ・チームとして-ひそかに、また法を超えて活動している。プライバシーの侵害、詐欺行為、住居侵入、ゆすり、場合によっては拷問と殺人を行なう強力なライセンスを与えられている……（『第四帝国』1989）

⑩の「対共産軍戦闘」というのは蒋介石が「共産軍に立ち向かって対抗して戦う」という意味であり、⑪の「対ゲリラ・チーム」も「ゲリラに立ち向かって対抗する」というチームなのである。この〈立ち向かって対抗する〉という意味素性は、特に兵器や軍事関係の造語に活発で、多くの「対～」という軍事用語が造り上げられている。例えば、

「対戦車ミサイル」「対潜水艦」「対船舶攻撃」

「対水上攻撃両用砲」「対戦車ライフル」「対テロ」

「対戦車ヘリコプター」「対領空侵犯措置」……

などがある。

軍事用語以外には、「マイナス的な現象(病気など)に対して妨害、対抗する」という意味の造語にも用いられる例も見られる。例えば、

「対カビ」「対腐蝕性」「対紫外線コートジェル」

「対摩耗性」「対麻薬闘争」「対がん用」「対疫病効果」

などがある。これらの例は、接頭辞「対-」がその後接するマイナス的な現象（「カビ」「腐蝕」「紫外線」「摩耗」「麻薬」）や病気（「がん」「疫病」）などの語基名詞に対し妨害・対抗をする、といった意を表す。これは、上で論じた、兵器名詞や軍事関係の名詞に対し妨害や対抗をするということと通じる用法と考えられる。

ここで、日中対訳の問題を考えてみよう。中国語の“反-”にはこの「対-」の(3)と似ている意味用法があり、中国語の“反～”派生語も軍事用語の造語に特に盛んだという特徴をもつ。例えば、

“反空降”“反登陸”“反還撃”“反伏撃”“反偵察”

“反圍攻”“反掃蕩”“反雷達”“反奸細”“反諜報”

などである。一方、日本語の場合、漢語接頭辞「反-」にはこの意味用法がないものの、外来語接頭辞「アンチ-」には似ている用法がある。例えば「アンチ・ニュークリアウエポン」「アンチミサイル」などである[21]。これは、日本語の漢語接頭辞「対-」と外来語接頭辞「アンチ-」が〈妨害して対抗する〉という共通の意味素性もつことにより、両者に類義関係が成立することを示す。中国語の“反-”と日本語の「対-」「アンチ-」のこの関係から、冒頭に取り上げたように、“反雷達導彈 、“反導彈”などの中国語が日本語の「対レーダーミサイル」、「対ミサイル」・「アンチミサイル」と訳されるわけである。

この(3)の意味用法をもつ「対～」派生語の例は、今回の実例調査では、41 例（16%）見つかったが、これは、(2)の用法に次いで二番目に高い割合である。

(4) 対象とする。

まず、例を挙げよう。

⑫ 抽選六十人家族初心者投げ釣り大会対釣り初心者の家族日３月９日（日）午前十時半ー午後４時半内釣り講習、釣り大会、……（『ひろしま市民と市政』2008 年 03 号）

⑬ 時十二月５日（金）午前十時ー十一時三十分パパとママの準備教室　対出産を控えた夫婦時十二月十三日（土）……（関東地方/東京都『ねりま区報』2008 年 33 号）

ここで用いられている「対～」というのは「～を対象とする」という意味が取れる。⑫では、市役所が主催するイベントの対象が接頭辞「対-」と結合する語基「釣り初心者の家族」であることが、⑬も区役所などが開く「パパとママの準備教室」の対象が「対-」と結合する語基の「出産を控えた夫婦」であることがわかる。この二例はいずれも役所の出した広報に載せてある、イベントなどのインフォメーションであり、中にそのインフォメーションの内容をはじめ、参加対象や日時などが載っているが、その参加対象が「対～」という派生語の造語パターンで示されているのである。

[21] 林（2013：第五章と第六章）

この「～を対象とする」という「対-」の意味用法は、(2)の用法「ある対象に向かう」から派生したものと思われる。次の⑭を見よう。

⑭ 野菜は必ず沸騰した湯でゆでる（栄養を壊さないよう）とか、玉葱は切ってから十五分以上おいて使う（対糖尿病）とか、料理は創造力なので、過程を楽しんでいる。（『あたしは非定型精神病なのだよ』2005）

これはイベントに関するインフォメーションではないが、料理についての説明であり、中に特に「糖尿病患者に対する」場合の玉葱の使い方が説明されているわけである。言わば、この「対～」は「～向け」「～を対象とする」という意味で用いられていると考えられよう。

上に挙げた例のように、この(4)の意味用法をもつ「対～」派生語は、広報などに用いられるのが多く、大体それをもって文を一旦切り上げるという点が特徴的である。語レベルというより句レベルに近い造語パターンだと言えよう。

なお、この用法の接頭辞「対-」と結合する対象は語のみならず、更に文レベルの例もあり、

⑮ 各団体でボランティア活動の仲介・受け入れなどを行うボランティアコーディネーターの資質向上を図ります。対団体などに所属し、コーディネーター活動歴が３年以上日１月十九日（土）午後１時ー５時、二十日（日）午前十時ー午後５時。（『ひろしま市民と市政』2008 年 01 号）

などのように、かなり自由に様々な文と結合することを確認することができる。

今回の実例調査では、(4)の意味をもつ例は語基異なり 18 例（7%）だけあった。このように少数なのは、その結合対象が人という意味分野の制限、また広報などでの使用という特殊な条件があるためだと思われる。例をもう少し挙げると、

「対市内に在住か通勤・通学の人」

「対十五歳以上の方（中学生を除く）」

「対サークル活動をしている方・家庭教育に興味関心のある方定百人」……

などがある。この「～を対象とする。～向け」という(4)の意味は、前に述べたように、(2)からの派生用法と考えられるが、字音語素や自立語としての「対」、そして漢語サ変動詞「対する」の説明のどこにもこの用法に関する記述がない。辞書の意味記述の不十分さではなかろうか。

(5) 人に接する。応対する。

漢語サ変動詞「対する」には、「客に愛想よく対する」といった例のように「人に接する。応対する。」という意味用法があるとされるが[22]、接頭辞「対-」にもこの用法があることが確認される。例えば、

⑯ 二度とこういうことはしないから許してくれ」　謝った末に“改心”を誓って女房の許しを請う。これが市民的感覚でいう対女房策だといっていいだろう。（『ハンパな人生論より極道に学べ』2002）

⑰ アラン・エドワーズは、スパイス・ガールズの広報担当やデイヴィッド・ボウイの対メディア代表などの仕事を通じて、ショウビジネスＰＲ界では知らぬ者のない存在である。（『ベッカム神話』2003）

などである。この(5)の用法は、前述した(4)と同じく、接頭辞「対-」の結合対象が人名詞に限られている点で共通している。が、(4)はその相手の人を対象とするのに対し、(5)はその相手に接する、応対するという意味を持ち、両者の相違が見られる。他の例も挙げよう。

「言葉遣いは『対部下用』と『上司および来客用』…」

「対母親との話題が中心になって」

この用法をもつ例はやはりその結合対象が「人」という意味分野の制限があるためか、今回の実例調査では語基異なり僅か 7 語例（3%）しかヒットできなかった。

[22] 『スーパー大辞林』（3.0）と『デジタル大辞泉』（バージョン 14.0）。

(6) 数量の比例、比率、割合

これは、「三対二の比率」という例のように、自立語としての字音形態素「対」の「二つ以上の数の間の比や得点を表す」という意味用法からのものであり、主にある数量に対する比例、比率、割合を表すのに用いられる。例えば、

⑱ 欧米の対国民総生産対医療費の半分しか消費しない医療費で，世界一の長寿に達している日本は，これまでと同様に独自の終末期を構築するべきである． (『老年医学 update』2003)

の中で、「対～」派生語は、日本の医療費は欧米の国民総生産、医療費に対する半分の割合であることを意味している。

ある数に対する比という限定の用法なので、「対～比」「対～比率」「対～率」といった高次結合の造語パターンがよく見られるのも、この用法の特徴である。例えば、

「対潜在ＧＤＰ比率」「対前期比」「対事業資産比率」

「対資本ストック比率」「対前年伸び率」「対売上高比（率)」

などが挙げられる。今回の「対～」の実例調査では、この用法の例は、25 例（10%）が検索できたが、これは全体の約 1 割であり、「対～」の用法の一つとして定着していると考えることができる。

「対」のまとめ

以上、漢語接頭辞「対-」の六つの意味用法や造語的特徴について論じてきたが、改めて今回の BCCWJ コーパスからの、接頭辞「対-」の派生語の調査結果をまとめてみる。

表一　接頭辞「対-」の意味用法別の用例数[23]

意味用法	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
用例数	23(9%)	145(56%)	41(16%)	18(7%)	7(3%)	25(10%)

表一で示されているように、今回の検索から収集できた「対-」の 259 例のうち、(2)の「ある対象に向かう、かかわる。」という用法が

[23] 表一の用例数は語基異なり語数。

圧倒的に用例数が多く、約半分以上も占めており、漢語接頭辞「対-」のいちばん中心的、言い換えれば、典型的な用法だと言えよう。次いで(3)「立ち向かって、対抗する。」という用法が 2 割近くの比率を有する。ところが、前述した考察を通して、中国語の“反～”派生語の対訳となるのは、いちばん典型的な用法ではなく、二番目に多い用法である(3)の「立ち向かって、対抗する。」であり、接頭辞「対-」の六つの用法の中で、この(3)の用法だけが中国語の接頭辞“反-”と類義関係にあるのである。

（三）「抗-」について

「抗」という字音形態素は、前述した「逆」と「対」と違って、自立語的な用法はなく、字音語素（例、「抗議」「抗争」など）、また接頭辞（例、「抗癌剤」など）だけの用法があるという。辞書[24]に載っている字音形態素「抗」の意味は次の二つにまとめられる。

（1）ふせぐ。おさえる。

（2）張り合う。敵対する。

今回の実例調査では接頭辞「抗-」を含む派生語は語基異なり 164 語例拾い上げられたが、二字漢語の 10 例を除いていずれも（1）「ふせぐ。おさえる。」という意味で用いられている、と明らかになった。例えば、

⑲ 特にアトピーの場合皮膚病の治療に効果的な亜鉛を多く含む食品や、ニラ、玉ネギなどの抗アレルギー食物、新陳代謝を促進させる作用のあるヨードを含む海藻類を常食してください……（『一個人（ikkojin）』2004）

⑳ そして物忘れ、ど忘れからくる痴呆の問題をよく理解し、その対策をしっかりと覚えてください。この抗加齢、抗痴呆ではホルモン、神経、栄養そして抗酸化物が課題です。（『百寿越えへの招待状』2003）

⑲では、ニラ、玉ネギなどは「アレルギーをおさえる食物」という意味であり、⑳も、「加齢や痴呆をおさえ」ようとする場合、ホルモ

[24] 注 12 と同様。

ン、神経、栄養そして抗酸化物（「酸化に対抗する物質」という意）が課題だということである。つまり、「抗～」という派生語は、接頭辞「抗-」と結合する語基要素の表す意味内容の病気やウイルス、マイナス的な物理現象などを抑えたり、またはそれを防いだりするという意味を表すのである。

今回の実例調査ではこの意味用法の接頭辞「抗-」は和語や漢語、外来語、更にアルファベット語と、かなり自由に様々な語基と結合することができると明らかになった。例えば、

「抗ＤＮＡ抗体」「抗インフルエンザ薬」「抗ウイルス性」
「抗ストレスホルモン」「抗菌抗かび効果」「抗高血圧」
「抗悪性腫瘍薬」「抗廃水処理」「抗紫外線ガラス」…

などが見られる。これらの例からもわかるように、この「ふせぐ。おさえる。」という（1）の意味用法は特に医療用語に多く用いられているという点が特徴的だと言える。

この医療用語に用いられる「ふせぐ。おさえる。」という用法は、「アンチエイジング」という派生語における外来語接頭辞「アンチ-」の意味用法と共通していると考えられる。故に、「アンチ～」派生語を「抗～」派生語と言い換えることができ、冒頭に述べた、「アンチエイジング」は「抗加齢」とも言えるわけである。

実は接頭辞「抗-」は派生語以外に、（派生語的な）二字漢語を造り上げた例も見られる。例えば、

㉑ この報告以降，抗精神病作用と同様に chlorpromazine の抗躁作用はプラセボを対象とした試験によって確認され，他剤を含め定型抗精神病薬は急性躁状態の治療に広く用いられてきた。（『双極性障害の治療スタンダード』2002）

の中の「抗躁」というのは、その前文「抗精神病作用と同様に」の提示の如く、「躁病をおさえ、ふせぐ」という意がとられる。他に類例として「抗災」も挙げられるが、このような派生的な二字漢語はかなり少数であろう。

一方、(1) の「ふせぐ。おさえる。」という用法ではなく、(2)「張り合う。敵対する。」という意味で用いられる、接頭辞「抗-」を含む派生語的な二字漢語の例も見られた。

㉓ 「下年掲借之路」を閉ざさないようにするために主体的・意識的に〈欠租〉を行っていたのであり、それはまさに抗租というべきものであった。(『明清福建農村社会の研究』2002)

上の引用文例からも理解できるように、「抗租」というのは、「田租」という政府のシステムに敵対、抵抗するという意味がとれ、即ち、前述した字音形態素「抗」の (2) の意味である。「抗」という字音語素のもつ「はりあう。匹敵する。敵対する」という意味[25]から考えれば、この「抗」の (2) 用法は、〈下から上への反逆、反抗〉というよりも、〈対等的な抵抗〉という意味素性をもつ「抗～」だと考えられる。これは医療用語に多く用いられる (1) の「ふせぐ。おさえる。」という意味用法とは相違する。他に、「抗日」「抗蔣」「抗幕(決戦)」などもこの用法の派生語的な二字漢語の例として挙げられる。本稿の実例調査では、この (2) の意味用法の接頭辞「抗-」は派生語的な二字漢語の造語にのみ止まり、二字漢語以外の派生語の造語においてはほとんどはたらかないように見受けられた。

前述した通り、今回の調査では接頭辞「抗-」を含む派生語は 154 例あり、いずれも (1) 用法の例であるのに対し、上述した (派生語的な) 二字漢語は (1) と (2) の用法をもつ例 (語基異なり) がそれぞれ僅か 3 例と 7 例しかない。というわけで、接頭辞「抗-」の典型的な意味用法は (1)「ふせぐ。おさえる。」ということであり、しかも殆ど派生語の造語に寄与している、と本稿の考察を通して明らかにできた。

四、「反−」・「アンチ−」との対照比較から

前節では漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」についてそれぞれの意味

[25] 『大漢和辞典』に「抗」という漢字について「㊦あたる。はりあふ。匹敵する。敵対する。」という解釈がある。

用法や造語的特徴を考察した。本節では、前節の考察内容を踏まえながら、それらと類義関係にある日中の漢語接頭辞「反-」及び外来語接頭辞「アンチ-」との対照比較を通して、これらの〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉という意味素性をもつ、「逆-」「対-」「抗-」「アンチ-」、そして日中同形の「反-」という五つの接頭辞は、どのような類義対応関係を示すのかを検討してまとめなおす。

まず、「逆-」という漢語接頭辞は、前節の（一）で論じた如く、(1)〈物事の本来または普通の順序・方向・位置関係などと反対、さかさまであること。〉（例、「逆指名」「逆時計回り」など）、及び(2)〈さからう。そむく。〉（例、「逆賊」「逆徒」「逆命」など）という二つの意味用法を有するが、(2)の意味はかなり少数の二字漢語の造語にだけ止まっており、(1)だけが接頭辞としての造語機能を果たす典型的な用法なのである。この接頭辞としての(1)の意味用法は同じ日本語の「反-」にも「アンチ-」にもないため、「逆-」は日本語の「反-」と「アンチ-」とは類義の対応関係はもたないのである。ところが、中国語の「反-」には“反擴散”“反操作”などのように「反対から。逆に。」という用法[26]があり、即ち、「本来または普通となるべき順番・方向と反対から、または逆に」という意味であるが、それが日本語の「逆-」と類義的な対応を示すのである。要するに、日本語の接頭辞「逆-」が中国語の接頭辞「反-」とは、〈反対から、逆から〉という意味素性で両者が類義関係をもつわけである。故に、この「反対から。逆に。」という意味の中国語“反～”派生語（例、“反電壓”“反封鎖”）は日本語に訳される場合、「反～」ではなく、「逆～」（例、「逆電圧」「逆封鎖」）と対訳されるわけである。

次に、「対-」という漢語接頭辞については、前節の（二）で論じたように、接頭辞「対-」は六つもの用法があるが、一番中心的・典型的な用法は「対新羅作戦」「対世界輸出」などのような「ある対象に向かう、かかわる。」という(2) の用法である。しかし、この典型的な「対-」の用法は中国語の接頭辞“反-”と対応の類義関係を示さ

[26] 林（2012）第 4 節の中国語「反～」の C2 用法を参照。

ないのである。中国語の接頭辞“反-”と類義対応関係を示す「対-」は、「 立ち向かって、対抗する。」という軍事関係の造語に限定された、二番目に造語力をもつ(3)の用法だけなのである。例えば、

“反火箭”—「対ミサイルロケット」

“反坦克”—「対戦車」

“反雷達系統”—「対レーダー・ミサイル・システム」

などである。ここで言う中国語の“反-”は「逆に妨害して対抗する」という意味素性がはたらく用法であり、林（2012）で論究した中国語の“反-”の四つの用法のうちの C4 用法に当たる。中国語のこの用法の“反-”も軍事用語の造語に多く生かされている[27]。但し、中国語の“反-”には〈逆に〉という意味素性も帯びているのに対し、日本語の「対-」はそれがない、と両者の間の相違点が見られる。

上述した日本語の「 立ち向かって、対抗する。」という用法の漢語接頭辞「対-」は、他に同じ日本語の外来語接頭辞「アンチ-」とも対応の類義関係を示すと思われる。「アンチ-」も多義語であるが、そのうち、英語の「preventing」という意味用法の借用から、特に〈～に対抗して妨害する〉という意味素性の用法（ア 2）が抽出される。例えば、「アンチミサイル」「アンチ・アクセス」などが挙げられるが、この「アンチ-」の用法が「対-」の(3)「立ち向かって、対抗する。」用法と類義関係を示すのである。但し、この外来語接頭辞「アンチ-」の用法は漢語接頭辞「対-」の(3)用法と違って、軍事関係のみならず、「アンチドーピング」といった〈マイナス的な意味内容や現象または不法、不当な行為など〉、また「アンチアレルギー」といった医療関係などと、幅広い意味分野でその造語機能を果たしている[28]。

つまり、日本語の接頭辞「対-」は、六つの意味用法をもってはいるものの、単に〈(妨害して）対抗する〉という意味素性（「対-」の(3)「立ち向かって、対抗する。」用法）だけを以て、中国語の接頭

[27] 林（2012）第 4 節の 4.1 を参照。
[28] 林（2013）第六章の第三節のア 2 用法を参照。

辞“反-”及び同じ日本語の外来語接頭辞「アンチ-」と類義対応の関係を示すわけである。これが、「(逆に) 妨害して対抗する」という意の中国語の“反～”派生語（例、“反導彈”）が日本語の「対～」(「対ミサイル」) または「アンチ～」(「アンチミサイル」) と対訳される所以なのである。

それから、「抗-」という漢語接頭辞は、前節の（三）で論じたように、「抗感染作用」「抗ストレスホルモン」などのような、特に、医療用語の造語に多数用いられる、〈ふせぐ。おさえる。〉という意味素性が生かされる用法だけは、「アンチバイオティクス」「アンチ白血病」などのような医療用語の造語にも用いられる外来語接頭辞「アンチ-」の「～を妨げる/～を防ぐ/～をおさえる」という意味用法と共通している。言わば、日本語の漢語接頭辞「抗-」と外来語接頭辞「アンチ-」は〈ふせぐ〉という意味素性で類義対応関係を有するわけである。これが、「抗～」派生語を「アンチ～」派生語と言い換えることができる所以なのである。

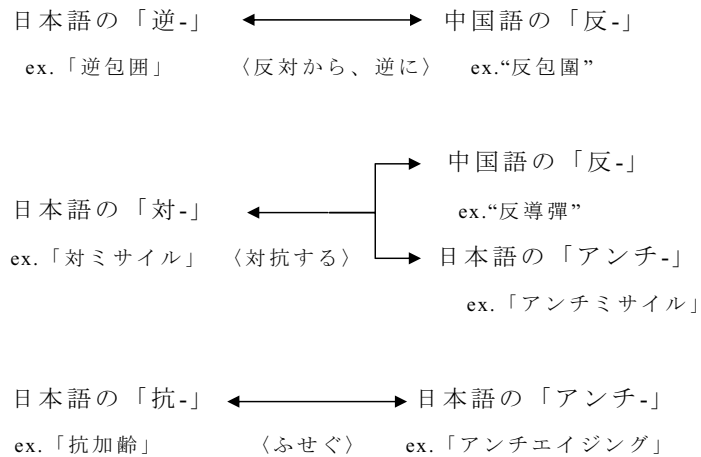
要するに、幅広い意味分野で造語機能を果たす、「防ぐ。対抗して妨害する」という意味の外来語接頭辞「アンチ-」は、同じ日本語の漢語接頭辞に置き換えるに当たって、軍事関係の場合は〈対抗〉という意味素性が特に求められる故に、「対-」と、医学関係の場合は〈おさえる〉という意味素性が要求されるために、「抗-」と対訳し分けられるわけであろう。

五、終わりに

以上、類義漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」を取り上げ、まずその意味用法や語構成について考察を行い、そして、同じ類義語どうしの日中同形の漢語接頭辞「反-」と外来語接頭辞「アンチ-」との対照比較分析も行った。この五つの接頭辞は〈物事の反対や逆、または反対・対抗する〉という共通する意味素性を有する一方、派生語を造り上げるに当たり、それぞれの特徴的な意味素性が生かされることにより、互いに、また中国語とやや複雑な類義対応関係を示し

ていることがわかった。下にこれらの接頭辞における類義対応関係を、類義語どうしにつながる共通の意味素性を示して簡略に示そう。

表二[29]



ところで、中国語の“反～”派生語の中には、実は二つの日本語派生語と対訳される例もある。例えば、

“反宣傳”—「逆宣伝」「対宣伝」

“反間諜”—「逆スパイ」「対スパイ」

中国語の“反宣傳”というのは「反対から、逆に宣伝する」という意味なので、日本語の「逆宣伝」は適切な対訳だと思われるが、他に「対宣伝」という日本語の対訳語も存在している。それは、「対宣伝」は「逆宣伝」と表現意図が異なるのだと考えられる。

本稿で見てきたように、中国語の“反-”と類義対応関係を示す日本語の接頭辞「対-」は〈立ち向かって、対抗する〉という意味である。このことから考えると、「対宣伝」というのは「宣伝に立ち向かって対抗する」という意味であり、「反対から、逆に宣伝する」という意の「逆宣伝」とは表現意図が相違するのである。

[29] 表二の中に〈〉で記してあるのは類義関係を示す両者の共通する意味素性である。

また、中国語の“反間諜”という例も、「逆から、反対からスパイする」という意味なので、日本語の「逆スパイ」がその対訳語としてまず考えられる。ところが、他に「対スパイ」という対訳語もある。この「対スパイ」の存在も「逆スパイ」と表現意図が異なることに起因すると考えられる。即ち、「対スパイ」というのは、その接頭辞「対-」の〈立ち向かって、対抗する〉という特徴的な意味素性から、「スパイに立ち向かって対抗する」ということを表現していると思われる。言わば、中国語の“反宣傳”“反間諜”などは多義語なのである。

以上の如く、中国語と日本語の翻訳に当たり、表現意図の差異から、異なる接頭辞が選ばれることになり、一対一の対訳になるとは限らないこともわかった。

第三節の考察では、字音形態素「逆」は〈下から上へさからう、そむく〉という意味素性をもち、「抗」は〈対等的な抵抗〉という意味素性をもつと述べたが、両方とも、派生語の造語においては生かされず、少数の二字漢語の造語にのみ止まっていることも明らかになった。では、〈下から上への反逆〉といった意味素性をもつ派生語は如何に表現されるのか。それは漢語接頭辞「反-」の果たす造語意味機能に関わると思われる。第二節で先行研究を概観する際、日本語の接頭辞「反-」が表すのは「下から上へ」の「逆」の概念だということを見た。即ち、「下から上への反逆」という意味を表す派生語の造語は主に接頭辞「反-」によって担われているため、「逆-」と「抗-」の造語では、この「下から上へ反抗する」という意味用法が生かされないと考えられる。

上に述べた、漢語接頭辞「逆-」と「抗-」の造語現象からのみならず、外来語接頭辞「アンチ-」と同じ日本語の漢語接頭辞との対訳ぶりからも、「反-」が「下から上への反逆」という概念を表す本質が裏付けられる。林（2013:第六章）では、「アンチ-」は、「下から上へ」の反対という意味素性をもつ「反-」と違って、主として「対等的」な反対という意味素性を有すると論じた。このことから、外

来語接頭辞「アンチ-」は、対等的な概念を表す〈立ち向かって対抗する〉や〈ふせぐ。おさえる〉という意味素性の漢語接頭辞「対-」そして「抗-」と対応関係を有することになるわけだと考えられよう。

以上、本稿では、〈物事の反対や逆、または反対、対抗する〉という共通する意味素性をもつ類義漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」についてその意味用法や造語的特徴を論じた上、更にそれらとその類義語どうしの日中同形の「反-」及び外来語接頭辞「アンチ-」との対応関係を究明できた。また、これらの類義対応関係の考察を通して、日本語の漢語接頭辞「反-」のもつ「下から上へ」の「逆」の概念も再び裏付けられたかと思われる。

参考文献

荒川清秀（1986）「－性 －式 －風」『日本語学』5-3、明治書院

斉藤倫明（2004）「周辺的意味の付与のされ方（結合形式の場合）―接頭辞「反-」を有する語を対象として―」『語彙論的語構成論 第1部 第4章 第2節』ひつじ書房

野村雅昭（1987）「複合漢語の構造」『朝倉日本語新講座 1 文字・表記と語構成 3．表記論を背景とした語構成論』朝倉書店

原由起子（1986）「特集・接辞 －的－中国語との比較から－」『日本語学』5-3、明治書院

宮地 裕（1977）「現代洋語の構成」『国語国文』46－5

山下喜代（2011）「字音接尾辞『式・風・的』の意味 ―プロトタイプとスキーマ―」『青山語文』41号

李 秀卿（1999）「近代漢語系接辞「反－」について ―Anti-の訳語における展開を中心に―」『文学研究論集 文学・史学・地理学』、明治大学大学院文学研究科編

林 慧君（2008）「日本語・中国語の同形字音形態素『～風』の意味―認知意味論による対照分析―」『台大日本語文研究』16（林慧君著 日本学研究叢書 6『現代日本語造語の諸相』臺大出版中心、2013所収）

林　慧君（2011）「字音形態素『～風』の接尾辞的用法―日本語と中国語の対照を通して―」『台灣日本語文學報』30（林慧君著　日本学研究叢書 6『現代日本語造語の諸相』臺大出版中心、2013 所収）

林　慧君（2012）「日・中同形の漢語系接頭辞『反』に関して―日本語と中国語の対照分析を中心に―」『台灣日語教育學報』第 19 号、台灣日語教育學會（林慧君著　日本学研究叢書 6『現代日本語造語の諸相』臺大出版中心、2013 所収）

林　慧君（2013）日本学研究叢書 6『現代日本語造語の諸相』臺大出版中心

電子資料及び辞書

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）国立国語研究所モニター公開データ（2013 年度版）

『スーパー大辞林 3.0』（三省堂）

『デジタル大辞泉』（バージョン 15.1）（(C)SHOGAKUKAN）

『日本国語大辞典』（『知識探索サイト　ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+』）

『中国語大辞典』（1994）角川書店、大東文化大学中国語大辞典編纂室

『大漢和辞典』（1996、修訂二版四刷）、大修館書店